

預金部の資金運用の変化と国債運用

永廣 顕 (甲南大学)

戦時期に入り最大の国債保有者となった預金部に焦点をあて、1920年代後半から戦時金融統制開始時までを中心に、戦前・戦時期の預金部の資金運用のあり方の変化とそこでの預金部の国債運用の動機を明らかにすることが本報告の課題である。

1925年に預金部の改革が実現し、資金運用の根本原則として「国家公共の利益」と「有利確実」の二原則が確立されたが、「有利確実」な運用方法であっても「国家公共の利益」に反するものには運用されず、また、「国家公共の利益」のためであっても「有利確実」でなければ運用されないことになっていた(理財局資金課(1964))。国債運用については、国債を円滑に発行、消化するという「国家公共の利益」と、不利益とならない程度に資金コストを上回る運用利回りを確保し最も安全な資金運用であるという「有利確実」の両原則を備えていたと考えられるが、「国家公共の利益」と「有利確実」について常に均等に重点が置かれていたわけではなかった。

戦前・戦時期の預金部の国債運用に関するこれまでの研究では、預金部が国債消化を円滑化する機能を果たしていたことが強調されてきた。しかし、預金部の資金運用のあり方とそこの変化については十分に検討されているとはいえない。また、新規国債の日銀引受発行開始以降、預金部の新規国債の元引受機関としての機能が低下し、預金部は日銀引受国債の購入・保有主体の一つとなるが、これまでの研究は、預金部の新規国債の元引受機関としての機能の分析が中心であり、日銀引受国債の購入・保有主体としての機能についてはほとんど分析されてこなかったように思われる(中島(1982)、山田(1990)、迎(1991)など)。

そこで、本報告では、新規国債の元引受と日銀引受国債の購入・保有の両面から預金部の国債運用の実態を分析しつつ、戦前・戦時期における預金部の資金運用原則の重点の変化とそこでの国債運用の動機について考察し、あわせて、新規国債の日銀引受発行開始後も預金部が国債の引受と購入・保有の両機能を果たし続けた資金運用の実態について検討する。

参考文献・資料

中島将隆(1982)「金融市場における預金部の機能変化」、玉野井昌夫・長幸男・西村閑也編『戦間期の通貨と金融』有斐閣

迎由理男(1991)「預金部・簡易生命保険資金の動員」、伊牟田敏充編『戦時体制下の金融構造』日本評論社

山田博文(1990)『国債管理の構造分析—国庫の資金繰りと金融・証券市場』日本経済評論社

理財局資金課(1964)『大蔵省預金部史—草創時代ヨリ昭和十六年ニ至ル』

預金部『預金部資金運用委員会会議議事録』